②干潟

紀伊水道

水産多面的機能発揮対策事業（事例 No.㊵）

干潟の名称	和歌川河口干潟		
干潟のタイプ	河口干潟	干潟面積	35ha
干潟の特徴	砂泥または泥の干潟。潮間帯の上部が堤防となっており、塩性湿地はないが、観海閣（かんかいかく）の北側で人工植栽されたヨシ原が若干見られる。 片男波（砂嘴（さし））と護岸で外海と隔てられており、亀ノ川河口付近で海域と接する。		
実施団体名	和歌浦活性化活動組織		
活動の経緯・概要	以前は潮干狩りでにぎわっていましたが、食害等によりアサリが激減したことにより地域として増殖事業と併せて干潟の保全活動を実施していくために活動組織を組織し、二枚貝を対象とした保全活動と地域の小学生を対象とした学習会の開催を実施しています。		
最近の活動実績	平成２９年５月２４日 （活動内容） 二枚貝（アサリ等）の食害生物であるツメタガイの駆除状況 平成２９年１０月１１日 （活動内容） 和歌山市立和歌浦小学校３年生を対象とした学習会の開催状況 		
活動継続のための手法	資金：県水産多面的機能発揮対策地域協議会より提供。協議会に対しては、現在、和歌山市の補助金として３０%、のこり７０%が国費。 人材育成：漁業者に対して、小学生とふれあう場を提供し、地域人としての自覚を促します。協力いただける地域の方に対しては、地域の一員としての「やりがい」「充実感」といった「生きがいづくり」を提供できると考えます。 連携方策：学習会を地元環境 NPO 法人に委託することで、接点が増えてまわりの他の環境NPO法人との連携や地域の各種団体との連携が円滑にできるようになったと感じている。		
活動の効果	漁業者は、地域の方や小学生たちとの触れ合うことで、地域の一員として「漁場」としてだけでなく「地域資源」としての誇りを感じるとともに、参加していただいた方には、干潟に愛着を持っていただけたと感じている。		
その他	資金面がすべて公費により賄われているため、国や市町村の懐具合で事業が終了してしまい、活動ができなくなってしまうことが今後の課題と考えます。		
生息する生物・希少種	ワカウラツボ（環境省絶滅危惧Ⅱ類（VU）：最初の発見地。県を代表する汽水産貝類） 二枚貝		

大阪湾

甲子園浜の干潟等、海浜の自然環境を守るための普及啓発事業（事例 No.㊷）

干潟の名称	西宮市甲子園浜		
干潟のタイプ	前浜干潟	干潟面積	10ha
干潟の特徴	自然の砂浜・干潟・磯がある貴重な浜。砂浜の東側には野鳥の貴重な餌場で、面積が少なくなりつつある干潟があり、国設浜甲子園鳥獣保護区・特別保護区となっている。		
実施団体名	特定非営利活動法人　海浜の自然環境を守る会		
活動の経緯・概要	甲子園浜は、昭和 46 年県の埋立計画発表に立ち上がり、PTA・住民の運動により全面埋立が阻止され残った自然の海岸である。その環境を未来に残していくための活動をする団体として平成 16 年に設立された。飛来する野鳥を保護するため、春の渡りの時期保護区への立ち入り禁止の啓発。野鳥観察会、生き物観察会、植物を含む生き物の調査や海浜清掃を実施。		
最近の活動実績	平成 29 年度 ・4 月 29 日　干潟の鳥観察会 ・4 月 29 日～5 月 7 日　特別鳥獣保護区立ち入り禁止啓発チラシ配り ・5 月 27 日　第 10 回大阪湾生き物一斉調査 ・6 月 4 日　海浜清掃　参加 104 名 ・6 月 10 日　甲子園浜遺跡探検 ・6 月 17 日　外来植物観察会　参加 20 名 ・7 月 17 日　海浜清掃　参加 90 名 ・9 月 24 日　海浜清掃　参加 108 名 ・10 月 1 日『写真でよみがえる甲子園浜』発行 ・10 月 2 日～9 日　甲子園浜１２ヶ月展開催 ・11 月 5 日　伊藤ハム合同クリーンアップ　参加計 130 名		
活動継続のための手法	資金：個人および法人会員（平成 30 年 6 月現在 97 名）による会費収入 その他助成金 人材育成：年間通して海浜生物、海浜植物、渡り鳥を観察。生物・植物・野鳥専門の先生を招いての講演会、観察会の実施。外部講習会への参加。これらによって知識を深め、地域の小学校などで環境学習を実施することにより、実践的な能力を高めている。 連携方策：環境保全に熱心な企業と海浜清掃を共催。海浜清掃時には、市内清掃会社がボランティアで協力。活動を続けているうちに、他地域で環境保全活動をしている団体との交流が自然と出来てきている。共同実施には至っていないが、互いに学び刺激を受けている。		
活動の効果	海浜清掃には常に 100 人前後の方々が参加しており、普段海に行く機会がない方、普段から海には来ているが一人で掃除まではできない人等が参加してくださる。甲子園浜を大切に思う気持ちが伝わってくる。		
その他	ホームページを立ち上げ管理してくださる方、イベント案内を作成してくださる方が出てきた。しかし事業全体を見通して事務に携わる人材が必要である。また生物、植物の知識をもっと高め活動を広げていくことが望まれるが、課題は高齢化である。次世代につないでいくための方策が見つかっていない。		
生息する生物・希少種	コアジサシ（環境省絶滅危惧Ⅱ類（VU）、兵庫県 B ランク種） ハマビシ（環境省絶滅危惧ⅠB 類(EN)、兵庫県 A ランク種） その他多くの植物や動物が生息・飛来（詳細は資料編記載）		

5/27 第 10 回大阪湾生き物一斉調査

6/10 遺跡探検

6/17 外来植物観察会

11/5　クリーンアップ

地域協働による尼崎運河の環境改善と活用（事例 No. ㊺ ）

干潟の名称	尼崎運河内、北堀運河		
干潟のタイプ	人工干潟	干潟面積	８１㎡
干潟の特徴	尼崎運河水質浄化施設内に設置されている人工干潟であり兵庫県事業として２０１２年３月に竣工した。水質浄化施設は、通水式の生物浄化手法により水中の栄養塩・懸濁物を除去し、貝や藻類などの浄化生物は適切な時期に人力で回収し堆肥材料として活用している。本干潟は、浄化プロセスの末端に位置しており、干潟の浄化力と生物多様性の創出を期待され、市民参加による順応的管理がなされている。		
実施団体名	尼崎運河〇〇クラブ		
活動の経緯・概要	尼崎運河の立地や関係するプロジェクト（例えば、21 世紀の尼崎運河再生プロジェクトや尼崎 21 世紀の森構想）を背景とし、兵庫県による尼崎シーブルー事業により「水質浄化施設」が建設された（2012 年 3 月竣工）。また、翌年 3 月にはその支援施設となる「北堀キャナルベース」が竣工し、現在ではこれらが一体となって運用されている。本施設の水質浄化の仕組みは、水質浄化に寄与する海中生物の飼育と、その生物を人力で取り上げ、堆肥やすだれ等に活用することで実現するものである。このような取組を現地では「水質浄化活動」と呼んでいる。この活動は市民協働により実施することになっており、本施設の竣工前に当地で行われていた水質浄化技術の現地実証試験の段階から組織づくりが進められた。そのため、本施設の竣工時点で官学民による市民協働活動への参画やその連携が開始されており、本施設の本運用において活動団体間の調整が必要なほどであった。そこで兵庫県からの提案で、尼崎運河の環境改善と利活用を行うことを目的に、2012 年 9 月に「尼崎運河〇〇クラブ」が発足した。本クラブは緩やかな連携を達成することを目的としており、基本的には年 1 回の総会において、活動団体間の活動内容について調整・承認が行われる。本クラブは複数の活動団体が連携した新しい企画を生み出す場としても機能しており、2012 年からは毎月第 3 日曜日に「尼崎運河オープンキャナルデイ」を開催し、水質浄化活動とともに会員がやってみたい企画を持ち寄ってさまざまな活動を実施している。 本クラブが主催となった取組例としては、オープンキャナルデイの他に、2015 年～2017 年に実施した「尼崎運河オープンキャナルフェスティバル」があり、将来的に日常的に行いたいと考えられている野外でのディナーや、であい橋ライトアップ、JAZZ ライブ等を開催し、新たな尼崎運河の魅力づくりを行った。他には、「干潟づくり活動」（2016 年～、人工干潟の順応的管理）がある。また、尼崎市の事業において、小学生向けの環境学習会に本クラブからの講師派遣を行っている。		

最近の活動実績	2017年7月16日：干潟の生物調査、順応的管理ワークショップ 2017年8月20日：干潟の地形改良、ミニすだれづくり講座 2017年9月10日：干潟の生き物探し調査、ミニすだれづくり講座 2018年2月18日：ヨシの刈り取り
活動継続のための手法	資金：「尼崎運河オープンキャナルフェスティバル」と「干潟づくり活動」は兵庫県からの助成金、尼崎市から講師派遣の謝礼金があるが基本はボランティアに依存 人材育成：尼崎市内小学生の環境学習会、ネイチャークラブ体験学習（成良中学校中心）、スーパーサイエンスハイスクール活動（尼崎小田高校）への支援や、オープンキャナルデイやオープンキャナルフェスティバル等における研究成果発表の場の提供を実施し育成 連携方策：事務局は兵庫県が担当しているほか、尼崎市事業を通した活動やSNS、市広報等を活用した情報発信、月1回のオープンキャナルデイの実施により一般とも連携した活動を実施
活動の効果	水質浄化活動の実践と改善（毎月1回） 尼崎運河での環境改善の取り組みの新聞掲載 尼崎運河での環境学習参加者のべ約5,300名 尼崎運河の活用イベントの実施（毎月1回のオープンキャナルデイ、年1回のオープンキャナルフェスティバルなど） 国土交通大臣の視察（2017年5月） 参画している中学生の表彰（環境大臣賞　文部科学大臣賞　林野庁長官賞など多数） 参画している組織の表彰（グリーンレジリエンス大賞）
その他	活動メンバーの固定化、一般市民参加者増加が課題
生息する生物・希少種	野鳥：ホシハジロ、カルガモ、カワセミ等 干潟生物：チチュウカイミドリガニ、ヒライソガニ、イソガニ等 （詳細は資料編記載）

播磨灘

あらい浜風公園この浦舟池内の干潟創出プロジェクト～よりよいジュンカンを目指して～

（事例 No.㊻）

干潟の名称	この浦舟池干潟		
干潟のタイプ	人工干潟	干潟面積	0.013ha
干潟の特徴	海と触れ合える場として造られた「あらい浜風公園」にある海水池、「この浦舟池」内に創出された人工の干潟		
実施団体名	Gata girl		
活動の経緯・概要	兵庫県高砂市の海岸は高度経済成長期に埋め立てられ、海を取り戻そうと入浜権運動が起こった。平成 18 年に臨海部の企業の協力で海と触れ合える場である「あらい浜風公園」が建設された。しかし、この公園に作られた池は藻類の繁茂、堆積、ヘドロ化、高水温化などの問題が発生した。池内に人工干潟を造り生物や植物による水質浄化と市民が干潟の環境を楽しめる憩いの場となるよう活動を続けている。		
最近の活動実績	・平成 29 年1月 21 日　総合（底質・生物・水質）調査、ヨシ刈り、ヨシ笛作り ・平成 29 年3月 18 日　看板設置 ・平成 29 年８月２日　干潟創出作業（地盤下げ） ・平成 29 年８月 19 日　総合（底質・生物・水質）調査 ・平成 29 年 10 月７日　総合（底質・生物・水質）調査 ・平成 29 年 11 月４日，５日　ヨシ刈り、ヨシ舟つくり 地元学童とヨシ刈り，ヨシ笛作り 地元学童と干潟創出作業 ヨシ舟つくり		
活動継続のための手法	資金：助成金 人材育成：地元の学童とともに環境改善活動に取り組んでいる。環境学習を実施し、人工干潟の循環と加古川河口干潟の循環との違いを比較、調査したり、生き物観察を行っている。 調査や活動に高校生や大学生を積極的に巻き込み、順応的管理を行いながら活動を継続している。 連携方策：加古川土木、兵庫県水大気課、徳島大学が連携して改善を進めている。		
活動の効果	平成 30 年現在、168.2 ㎡の干潟を造成した。そのうち 65.5 ㎡にはヨシ原が広がり、加古川河口干潟から移動させたアシハラガニ、イソガニの生物の定着が、48.7 ㎡の泥干潟ではウニミナやヤマトオサガニの定着が確認されている。さらに、それらの生物が新規加入されることを目標に、科学的調査をしながら底質の改善などを行ってきたところ、今年は、ヤマトオサガニの産卵、孵化、成長した個体が確認された。さらにアオサギやカモの飛来も確認されており、徐々にモデルとする加古川の河口干潟の生物相に似つつある。		
その他	児童を対象に、池内に繁茂した海藻を除去し、池内の栄養塩を含んだヨシを刈り取りヨシ舟にするイベントを開催している。		
生息する生物・希少種	野鳥：アオサギ、マガモ　干潟の生き物：ヤマトオサガニ、イソガニ等 海藻：シオグサ、スジアオノリ　植物：ヨシ		

備讃瀬戸

リフレッシュ瀬戸内（海岸クリーン作戦）（事例 No.㊾）
海辺の学校（事例 No㊿）

干潟の名称	㊾大殿洲・西大島神田・夏目・鳥の江・東村・天神　㊿大殿洲		
干潟のタイプ	前浜干潟、河口干潟	干潟面積	―
干潟の特徴	砂泥で約半分を細砂が占める。含水率は概ね 25%で，年間を通じて硫化物は 0.03mg/g 以下である。干潟にはカブトガニが生息し，周辺の一部の砂浜はカブトガニの産卵に適しており,平成 21 年から毎年自然産卵が確認されている。		
実施団体名	㊾、㊿笠岡市立カブトガニ博物館　㊾笠岡市建設管理課		
活動の経緯・概要	㊾カブトガニ博物館の前身であるカブトガニ保護センターが３０年以上前からカブトガニの生息環境を保護するために干潟や海岸の清掃活動実施し、今日まで継続している。現在は取組に賛同する企業や団体も多数参加し、毎年 1,000 人規模で実施している。毎年、約６トンのゴミを回収することができており、環境保全に繋げることができている。 ㊿１０年以上前に県の事業で干潟の観察会を実施したのがきっかけで、カブトガニ博物館が引き継ぐ形で現在も実施している。		
最近の活動実績	㊾平成 29 年　7月３０日 海岸清掃 ㊿平成 29 年　８月　５日 ○海辺の生物観察　○アサリの浄化実験　○カブトガニの幼生放流 		
活動継続のための手法	資金: ㊾市でゴミ袋・軍手の支給及びゴミの回収を行っている。そのほか資金の援助等はない。 ㊿博物館の事業として、館長・学芸員が講師を担当し、館内で育成したカブトガニ幼生を放流しているため、特に大きな費用は発生していない。 連携方策: ㊾地域住民だけでなく、県内外の個人、団体、企業などが積極的に連携しながら取り組んでいる。		
活動の効果	㊾県内外から 1,000 人を超えて参加するようになり、毎年約６トンものゴミ回収ができているほか、干潟や海岸保全の意識高揚にもつながっている。 ㊿昭和 60 年代頃からカブトガニが急激に減少していたが、本取組のほかカブトガニや干潟の保護活動が積極的に行われたことにより、カブトガニの個体数が徐々に回復している。海辺の学校は、参加者に干潟の大切さを学ぶ場として貴重な機会を提供している。		
生息する生物・希少種	カブトガニ、マルテンスマツムシ（環境省絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）） その他野鳥、干潟の生物が多数生息　（詳細は資料編記載）		

備後灘

水産多面的機能発揮対策事業（事例 No.㊷）

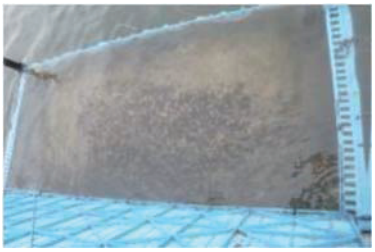
干潟の名称	観音干潟、灘干潟、戸崎干潟、百島干潟		
干潟のタイプ	前浜干潟	干潟面積	―
干潟の特徴	地区の海岸線には、自然干潟や国・県が造成した人工干潟が点在し、その干潟では地区の漁業にとって重要なアサリを中心とした二枚貝類の漁業が行われている。		
実施団体名	広島県東部アサリ協議会（浦島地区）		
活動の経緯・概要	広島県東部の尾道市・福山市・三原市の漁協 13 組合が平成 25 年に「広島県東部アサリ協議会」を設立。尾道市ではアサリ漁獲量が減少しており、干潟の有する水産有用種の増殖機能等の低下が懸念。この状況を改善するため、アサリ漁場の耕耘や漂着物の処理を行うことで干潟の保全を図るとともに、地元小学生へ教育の場を提供することで、干潟の魅力を伝えています。		
最近の活動実績	平成 29 年 10 月 4 日　干潟学習会開催（地元小学生 25 名、中高生 7 名等が参加） 平成 29 年 4～11 月 複数の干潟で耕耘、網（食害防止用）のメンテナンス、モニタリング等を実施 		
活動継続のための手法	資金：水産庁の水産多面的機能発揮対策事業を活用 人材育成：地域の子供たちを対象に海岸清掃や干潟観察会を行うなど人材育成に努めている。 連携方策：NPO 法人さとうみ振興会等との連携		
活動の効果	干潟の耕うん、稚貝保護や食害防止ための網の設置などにより、アサリの定着・再生の状況を調査している。		
その他	児童を対象に、池内に繁茂した海藻を除去し、池内の栄養塩を含んだヨシを刈り取りヨシ舟にするイベントを開催している。		
生息する生物・希少種	アサリ（他の生物調査していない）		

有明浜の自然環境を守るための普及啓発活動（事例 No.㊹）

干潟の名称	有明浜		
干潟のタイプ	前浜干潟、河口干潟	干潟面積	50.6ha
干潟の特徴	全長２km の自然砂浜と干潟が貴重な浜である。砂浜の北側には、九十九山の岩場があり、干潟と瀬戸内海有数の海浜植物群落の宝庫である。		
実施団体名	有明浜の海浜植物を観察する会		
活動の経緯・概要	有明浜の自然環境を個々で観察していたが、そのメンバー全員で観察することにした。有明浜及び干潟の保護育成活動や海浜植物観察会・干潟の学習会を開催し、砂浜と干潟の環境保全活動を行っている。		
最近の活動実績	平成２９年５月１５日 有明浜の海浜植物保護育成計画の現地指導（広島工業大学） 平成２９年５月２０日 観音寺ボーイスカウトに対してアサギマダラ蝶のマーキング体験会と海浜ゴミ拾い活動を実施 平成２９年５月２１日 市観光協会と共催でアサギマダラ蝶のマーキング体験会を開催（参加者３６人） 平成２９年６月２２日 有明浜スナビキソウ保護活動を実施（警告用看板の交換作業） 平成２９年９月１４日 有明浜の樹木伐採とウチワサボテンの除去作業を実施 平成２９年９月２６日 台風１８号に伴う有明浜のゴミ拾い 平成２９年９月２８日 アサギマダラ飛来中ののぼり 10 本を市内に設置し啓発活動 		
活動継続のための手法	資金：団体としての資金はないため、会員が負担している 人材育成：研修会の実施等、植物の観察会を継続的に実施し、有明浜への関心を育てている。 連携方策：有明浜のゴミ問題を考える団体など関係団体との連携を深めている。		
活動の効果	活動を通して、市民の干潟への関心が少しは出てきたと思う。		
その他	有明浜の自然環境を保全するため、有明浜に係る団体全体の協議会を設置する必要性を感じる。		
生息する生物・希少種	コナガエのアカカゴダケ（四国内では有明浜のみ。ハマゴウに寄生） 野鳥：ウミウ他　（詳細は資料編記載）		

燧灘

加茂川干潟、海浜の自然環境を守るための普及啓発事業（事例 No.㊺）

干潟の名称	西条市加茂川干潟		
干潟のタイプ	河口干潟	干潟面積	383ha
干潟の特徴	瀬戸内海に流入する加茂川、中山川の河口に形成された砂泥質の干潟。愛媛県に現存する干潟の５割を占める。野鳥の餌場、観察場となっている。		
実施団体名	禎瑞環境クラブ		
活動の経緯・概要	西条市禎瑞加茂川干潟は多くの生物、二枚貝の生育地でだったが、近年二枚貝が絶滅の状態に危機感を感じ、二枚貝復活の為に生育環境を整え、二枚貝の調査を図り、元の環境に戻したいことと、多くの方に自然環境の現状を知って欲しいため活動に取り組みました。干潟に飛来する野鳥の観察会、生き物観察会及び環境普及啓発活動を実施している。		
最近の活動実績	海岸清掃 平成 29 年６月25 日 平成 29 年９月 24 日 干潟の保全 平成 29 年２月　４日 アサリの移植（かごの中に砂、小石、アサリ、ハマグリを入れる） 平成 29 年６月 24 日 （アサリの稚貝をかごの中に入れ調査） 平成 29 年８月 22 日 アサリ調査（かごの中の泥を除き、砂、小石に入れ替える）  加茂川干潟生き物調査 平成 28 年 11 月 12 日 小学生による自然観察会 平成 28 年 11 月 13日 		
活動継続のための手法	資金：水産庁の水産多面的機能発揮対策事業を活用 人材育成：小学生、保育園との取組。自然に興味深い若い方を育てる。 連携方策：地域の方との協力。高校生によるボランティアの参加。地元企業との連携で人材確保を図る。大学との連携を図る。 その他：子供たちとの交流を図り自然の大切さを伝えたい。絶滅の二枚貝の自然保護、調査に努めたい。		
活動の効果	小学校、幼稚園との連携により多くの子供たちへの普及活動の成果が期待できた。干潟の再生の道筋が見えて来た。多くの方との意見交換が出来た事で学ぶ物が多かった。		
その他	自然環境に接する機会を開催して多くの方にアピールしに行きたい。		
生息する生物・希少種	ナベツル（環境省絶滅危惧Ⅱ類（VU）） その他　（詳細は資料編記載）		

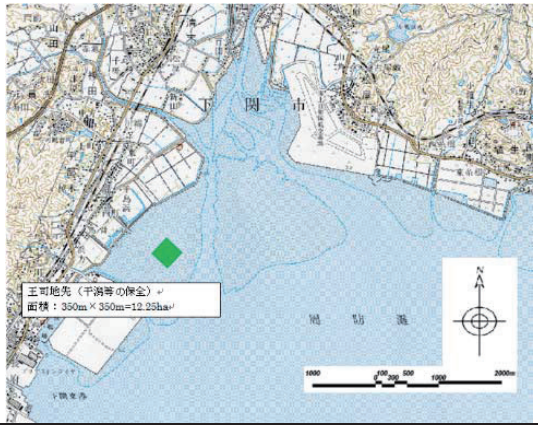
広島湾

アサリの再生事業（事例 No.㊺）

干潟の名称	宮島大元公園沖の干潟		
干潟のタイプ	河口干潟	干潟面積	3.750 ㎡
干潟の特徴	宮島の弥山から流れる紅葉谷川と大元川の二つの河川の土砂の流出で干潟が成り立っている。干潟には多種多様の生物が生息しいて、沖合にはアマモ、コアマモも生息する。この周辺は干潟観察や学習会に適している環境がある。		
実施団体名	NPO 法人宮島ネットワーク		
活動の経緯・概要	宮島の自然・歴史・文化を保護・継承しながら、島内外の人々や団体等との連携によって地域の保全と活性化を図る取組の中の一つとしてアサリ再生事業を実施。養殖を手がけてきた方が病気や高齢化で作業が困難となり放置状態であったため、養殖技術の経験もあり、海の環境保全研究事業として、アサリの自然再生育成による海浜環境の維持研究、管理、アサリ保護（瀬戸内海にアサリの幼生が拡散する）を実施。干潟観察体験事業として潮干狩りを実施		
最近の活動実績	平成 29 年 1 月 28 日～29 年 12 月 30 日　清掃整備と成貝の回収　　70 回 平成 29 年 3 月 13 日　干潟観察と潮干狩り（宮島の磯・生き物調査団） 平成 29 年 4 月 29 日　干潟観察会と潮干狩り（パパフレンド協会） 平成 29 年 5 月 10 日　アサリ稚貝　約２ミリ育成ネット袋詰め作業（宮島町長浦） 平成 29 年 5 月 24 日　アサリ稚貝　約２ミリ育成ネット袋詰め作業（宮島町長浦） 平成 29 年 7 月 10 日　アサリ稚貝　育成ネット袋詰を裏返し（宮島町　長浦） 平成 29 年 7 月 24 日　アサリ稚貝　約 10～15 ミリ育成ネット回収　長浦 （稚貝５袋放流） 平成 29 年 7 月 25 日　アサリ稚貝　約 10～15 ミリ育成ネット回収　長浦 （稚貝 1.5 袋放流） 平成 29 年 8 月　9 日　アサリ稚貝　約 10～15 ミリ育成ネット回収　長浦 （稚貝２袋放流） 平成 29 年 9 月　5 日　アサリ稚貝　約１５～20 ミリ育成ネット回収　須屋浦 （稚貝４袋放流） 		
活動継続のための手法	資金：独立採算。アサリ販売で維持。 人材育成：会員は高齢者が多く、長期の活動は期待できない。大学生の協力は得られるが、安定した人材は期待できない。干潟観察会等の指導者に、維持作業の活動協力を依頼している。 連携方策：「みやじま未来ミーティング」「宮島の磯・生き物調査団」「パパフレンド協会」「宮島学園」「環境省宮島地区パークボランティアの会」などと連携して、学習会を実施 その他：子どもや親子潮干狩りの体験では収益が上がらないので、旅行業者と提携して一般客等を対象に収益を上げたい。防御網の維持管理作業時間が大半を占めるので外国人作業者の協力も得たい。		
活動の効果	現在干潟が減少し、アサリは限られた場所しかないのが現状。潮干狩りに参加した子どもや親たちは喜びや感動にあふれ楽しんでくれた。 昨年秋の幼生貝が着底して稚貝が育っていく。同時にこの養殖場のアサリが産卵し、幼生となって瀬戸内海へ旅立ったと確信している。		
その他	世話役も後期高齢者に近づき、適した後継者が見当たらない。今まで無償であるが、来年頃はアサリの増産が見込まれ後継者の人件費が賄えられる。適した人材を期待したい。 ＜参考＞宮島ネットワークホームページ（http://miyajimanetwork.com）		
生息する生物・希少種	アサリ（その他は調査未実施）		

周防灘

干潟の耕耘、ツメタガイ等の除去（事例 No.⑯）

干潟の名称	王司（千鳥ケ浜）干潟		
干潟のタイプ	前浜干潟、河口干潟	干潟面積	―
干潟の特徴	下関市の瀬戸内海側に位置し、アサリ、ハマグリ等の二枚貝の生息場となっている。また、冬季はノリ養殖も営まれている。底質はほぼ砂泥質で、底生生物はカニ類、ヤドカリ等が生息している。		
実施団体名	王司干潟改良グループ		
活動の経緯 ・概要	所属する漁業協同組合の地先は約 700 万m^2 の干潟を有し、かつては採貝漁業やノリ養殖が盛んであったが、30 年程前からアサリ漁獲量が激減している。地元小学校の海浜学習（海岸のゴミ拾い、潮干狩り体験）の中で、子供たちからも「潮干狩りしてもアサリが見つからない」との声が出るようになった。このため、かつての豊かな干潟を復活させるため、アサリを増やす取組を開始した。平成 21 年度に当グループを結成し、県や市の協力を得ながら、干潟環境の改善（耕耘）、アサリを食害するツメタガイ類の除去を継続実施している。更に、アサリ稚貝の沈着促進を図るための竹を密集して設置したり、アサリ母貝を保護するための被覆網の設置等の取組も行なっている。		
最近の活動実績	平成２９年４月２４日：清掃活動　参加者４７８名 （地域の小学生との共同活動） 平成２９年６月９日：ツメタガイ類及びその卵塊の除去活動　参加者８３名 （地域の小学生との共同活動） 平成２９年７月２４日～８月２２日：竹立て活動 平成２９年８月２１日～８月２２日：干潟の耕耘活動 平成２９年８月２３日：モニタリング 平成２９年１２月４日：アサリ母貝団地設置  ツメタガイ類及びその卵塊の除去活動 干潟の耕耘活動		
活動継続のための手法	資金：水産多面的機能発揮対策事業（国費）及び県市費 人材育成：干潟の現状を地域の子供たちに知ってもらうため、地元小学校が実施する海浜学習に協力するほか、平成 24 年度からは地元小学生と共同でツメタガイの除去活動を行なっている。活動を一部の人間の取組とせず、漁協組合員と女性部を構成員とし、全員で活動を行っている。 連携方策：地元小学校との連携はもとより、県や市による専門的な知見に基づくアドバイスを受けながら、干潟の再生に取り組んでいく。		
活動の効果	耕耘後、竹を密集して設置した場所をモニタリングした結果、アサリが見られるようになった。最近では、澪筋を中心にアサリの稚貝が多く出現している。		
その他	アサリ（稚貝、母貝）を保護するため、引き続き、環境改善、食害生物の除去の取組を進めていく。		
生息する 生物・希少種	アマモ類 アサリ、ハマグリ等の二枚貝類、ガザミ、カニ類、シャコ、ゴカイ類等		

椹野川河口干潟等における里海再生活動（事例 No.⑰）

干潟の名称	椹野川河口干潟（山口湾）		
干潟のタイプ	河口干潟	干潟面積	344ha
干潟の特徴	シギ・チドリ類やカモ類など多くの渡り鳥や野鳥の休息地となっており、日本の重要湿地 500 に選ばれている。また、絶滅危惧種カブトガニの生息地。		
実施団体名	椹野川河口域・干潟自然再生協議会		
活動の経緯 ・概要	椹野川河口域・干潟自然再生協議会（2004 年設立）では、①椹野川河口域、干潟及び山口湾の生物多様性の確保、②産官学民の協働・連携、③科学的知見に基づく順応的取組の３つの視点を基本として、椹野川河口干潟等の『里海』の再生を目標に様々な取組を進めている。流域の多様な主体の参画と産官学民の協働・連携により、協議会構成員が干潟耕耘、カブトガニ生息状況調査、野鳥調査、調査研究、環境学習活動等を実施している。		
最近の活動実績	➢ 干潟再生活動（2017 年４月 29 日）参加者：430 人 干潟耕耘、アサリ再生活動、生物観察会、潮干狩り体験等 ➢ あさり姫プロジェクト@椹野川河口干潟 （2017 年７月 22 日）参加者：50 人 竹を活用したアサリ育成手法による環境学習会 ➢ カブトガニ幼生生息調査　参加者：計 50 人 （2017 年８月 20 日、９月８日） ベルトトランセクト法による生息状況調査 ➢ カブトガニ観察会（2017 年８月 20 日）参加者：54 人 親子対象の観察会 ➢ 野鳥の教室（2017 年 12 月３日）参加者：19 人 山口県立きらら浜自然観察公園における野鳥観察等 ➢ 二枚貝・野鳥調査、調査研究等（通年） ➢ ナルトビエイ駆除（2017 年７月～10 月） ➢ 協議会会議（2017 年１月 29 日、４月 29 日）	 椹野川河口干潟（南潟） 干潟の耕耘作業 地元産アサリ	
活動継続のための手法	資金：各協議会委員が、民間の助成等を受けながら活動を継続しているが、資金確保は困難な状況。協議会では、「ふしの干潟いきもの募金」を設立し、地域住民、団体、企業等から幅広く、継続的に協力を受けることで、協議会委員の活動を支援する仕組みづくりを進めている。 人材育成：委員がボランティアで活動を継続してきたが、高齢化や人員減少により厳しい状況にある。このため、協議会では、「ふしの干潟ファンクラブ」を設立、ボランティアの組織化、活動の主体となる人材の発掘、情報発信の活性化等により、活動を継続させる方策を進めている。 連携方策：協議会は、干潟等や流域に関わる地域住民、学識者、研究機関、環境保全団体・NPO 等、漁協、森林組合、行政機関等の多様な主体で構成。この他、活動や募金等を通じて、教育機関、企業、飲食店、金融機関等も関わっており、地域の活動として広がりをみせている。様々な機会を通じて、活動に関わってもらう働きかけが重要。 その他：資金（寄付金）や人材の確保には、活動に“共感”を受けることが重要。人により価値観は異なるので、活動の効果を様々な指標を用いて評価することが重要である。 ※評価指標の例：活動の主体となる人材の確保、取材件数、野鳥やカブトガニの生息数等		
活動の効果	・アサリ収穫量：243kg　　・潮干狩りの参加人数：150 人 ・干潟再生活動イベントの参加人数：430 人（4 月 29 日） ・カブトガニ幼生生息調査における確認個体数：913 個体 ・クロツラヘラサギの飛来数：31 羽　　・活動に関わった大学数：３校 ・活動に関わった企業数：６社　　・取材件数：８件		
その他	活動の主体となる人材の確保、募金の効果的な運用が課題		
生息する 生物・希少種	カブトガニ（環境省絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）） クロツラヘラサギ（環境省絶滅危惧ⅠＢ類（EN）） その他多数の希少種も含め多様な生物が生息　　（詳細は資料編記載）		

曽根干潟のカブトガニと生息地の自然環境を守るための普及啓発事業（事例 No.⑦1）

干潟の名称	曽根干潟		
干潟のタイプ	河口干潟	干潟面積	517ha
干潟の特徴	環境省「重要湿地」やＩＢＡ重要野鳥生息地に選定され、絶滅危惧種のカブトガニやズグロカモメなどが見られる国際的にも貴重な湿地。泥質、砂泥質、砂質、礫と多様な底質があり塩生湿地もある。漁業では豊前海一粒牡蠣が有名。周辺には農地や産業用地が広がり、沖には北九州空港がある。		
実施団体名	日本カブトガニを守る会福岡支部		
活動の経緯・概要	平成６年から平成７年の調査で公式的に生息が確認される。長期モニタリング調査を始める。平成９年日本カブトガニを守る会の福岡支部を設立。 国内最大級の生息地である曽根干潟のカブトガニの保護と生息地の自然環境を守るために、幼生調査や産卵調査を継続的に行うほか、産卵観察会等の実施や展示施設での解説等の環境普及啓発活動、産卵場整備や地元団体との協働による干潟の清掃等の保全活動を継続実施している。		
最近の活動実績	平成 29 年５月 20 日　春の干潟の野鳥と水辺の希少生物観察会・清掃活動共催 平成 29 年６月９日～15 日，24 日～30 日　カブトガニ産卵調査 平成 29 年６月 11 日　朽網海岸漂着ゴミの清掃・産卵場整備共催 平成 29 年7月８日～15 日，22 日～29 日　産卵調査 平成 29 年７月 23 日　産卵観察会 平成 29 年７月 25～26 日　広島大学「曽根干潟における生息状況」調査協力 平成 29 年７月 27 日　産卵観察会と干潟清掃共催 平成 29 年８月７日～12 日，22 日～25 日　産卵調査 平成 29 年９月５日～10 日，19 日～23 日　１齢幼生打ち上げ個体の保護 平成 29 年９月 24 日　カブトガニシンポジウム後援，　支部会員２名講師 平成 29 年 11 月 11 日　秋の干潟の野鳥と河口の希少生物観察会・河口清掃共催 海岸清掃活動 産卵観察会 カブトガニ自慢館		
活動継続のための手法	資金：守る会本部からの支部交付金は少額、活動助成金などを獲得する必要があるが、申請事務手続き等の人材不足もあり、ほとんど助成を受けていない。ほとんど手出しで、講師謝金で補填しているのが現状。 人材育成：人材が、高齢化し新しい調査担当者を募っているが、昼夜の活動や技術も必要で後継者が見つからない。体力を要するし安全面も含め、なかなか一般化しにくい。市民参加型の調査法を導入するなどして個人の負担を減らして情報を集積するような方法も工夫をしたい。 連携方策：地元まちづくり協議会や自治連合会等との連携で、海岸清掃、河川や上流森林等の流域環境整備も含め協働できるようになってきた。啓発活動もまちづくり団体の行事等への積極的参加で機会が増えた。調査活動は、国交省の委託調査を行う調査会社や大学研究者との連携、協力等を通して、生息状況や干潟の現状把握に役立てている。 その他：支部は県内３地区に分かれ広範囲なため連携した取り組みが難しい上に組織自体が小さいので、大学や企業も含めた地域連携と地域活性化などの協働の活動の中に入り込みながら進めていくようにしている。		
活動の効果	長年にわたる継続調査の結果、国内トップクラスの産卵・生息地であることが明らかになり、また周期的な変動の可能性も見えてきた。地元団体や企業との連携による保全活動が定着してきて、住民の意識も少しずつ向上してきている。		
その他	絶滅危惧種カブトガニの国内有数の生息地でありながら、カブトガニを守るための法的整備はされていない。周辺開発等による影響も少なからずみられる。１団体や地元住民の取り組みだけでは限界もある。干潟の環境の総合調査実施や干潟保全のための法整備、積極的な保護政策を望む。		
生息する生物・希少種	カブトガニ（環境省絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）） クロツラヘラサギ（環境省絶滅危惧ⅠＢ類（EN）） ズグロカモメ（環境省 RDB 絶滅危惧Ⅱ類） その他多数の希少種も含め多様な生物が生息　　（詳細は資料編記載）		

生きもの元気、子どもも元気、漁師さんも元気な中津干潟・豊前海干潟を未来へ

（事例 No.⑫）

干潟の名称	中津干潟・豊前海		
干潟のタイプ	河口干潟	干潟面積	1347ha
干潟の特徴	周防灘西位置し、瀬戸内海最大規模の面積を有す。中心が中津干潟。砂質干潟、砂泥質干潟、泥質干潟、礫干潟の他、河口部には塩性湿地、砂浜、砂嘴などの環境がある。生息生物種のうち希少種が 30%近い。		
実施団体名	NPO 法人水辺に遊ぶ会		
活動の経緯・概要	平成 11 年、この干潟で小さなカブトガニを見つけたことをきっかけに、この誇るべき自然環境を次世代を担う子どもたちへと守り伝えるため、活動を開始しました。 主な内容は①自然観察会や環境学習などの啓発活動、②生物調査（底生生物・鳥類・魚類・カブトガニ・アオギスほか）、環境調査、漂着ゴミ調査、郷土史聞き取りなど調査研究活動、③ビーチクリーン、松林景観再生活動、④漁業体験他ブルーツーリズム、⑤合意形成の推進ほか		
最近の活動実績	啓発活動（参加者 1068 名） 平成 29 年５月４日ビーチクリーンと松林再生 平成 29 年５月 27 日ひがたまつり （観察会とワークショップ） 平成 29 年６月 27 日おさかなホネホネ教室(骨の勉強) 平成 29 年７月 22 日夏休み干潟観察会 平成 29 年７月 30 日底曳き網の生きもの観察 平成 29 年８月 20 日アカテガニ産卵観察会 平成 29 年７月 20 日～８月 25 日夏休み海のワークショップ 平成 29 年 10 月１日ビーチクリーンと松林再生 平成 29 年 10 月 29 日海苔巻き教室 平成 29 年 11 月３日浜遠足（再生松林で環境イベント） 調査研究活動 平成 29 年５月～９月カブトガニ生態調査・シギチドリ類調査・ベントス調査 研修会・学習会 平成 30 年３月４日中津干潟アカデミア第１回研究発表会開催（中津市共催） 環境学習 中津市内小中学校：７校　延べ 11 回　宇佐市内小中学校：３校　延べ５回 福岡県豊前市内小学校：３校　延べ６回		
活動継続のための手法	資金：主に助成金・補助金、その他として事業収入、寄付、会費 人材育成：スタッフ１名雇用により、事業全般を実施できる人材を確保。 中津干潟アカデミア設立で調査研究する若手研究者と学生の支援、研究者や大学生と地元中高生の交流の機会を設けることによる、次世代人材の育成 連携方策：HP、SNS、紙媒体、イベント等を通じ、徹底した情報公開を行うことにより、連携団体へのアピール。 平成 29 年実績：大学６校・企業４社・NPO3 団体・地域２団体 その他：資金獲得のため、オリジナル商品の販売（カブトガニサブレ・海苔・青のり・生物グッズほか）ネイチャーセンターと博物館を兼ねる「ひがたらぼ」を自力で開設、運営		
活動の効果	小さい頃に活動に参加した子どもたちが、大学で生物学や水産学を専攻し中津干潟で研究を行ったり、地元自治体への就職や、社会人ボランティアで再び参加するケースが増えてきた。その姿を見て、同じ道に進もうとする子どもが少数だが確実に育ってきている。		
その他	規模・質ともに瀬戸内海で誇るべき自然であるが、地域での評価が非常に低く、漁業の低迷もあり、埋立や開発の対象となることが未だに多く、海域保全のための施策がなされていないのが現状である。この状況を打破し、豊前海干潟の恒久的な保全の方向性を地域で策定し、市民参加で実現することが目標である。		
生息する生物・希少種	シギ・チドリ類等の保全対象の国際基準を満たす渡り鳥が多種多数飛来。 その他希少種としてアオギス、カブトガニが生息。又塩性植物のまとまった生息がみられる。（詳細は資料編記載）		